

# 「この娑婆に掴みどりはなし」

京都大学大学院エネルギー科学研究科教授・新宮 秀夫



今から300年ほど昔、井原西鶴は「日本永代蔵」の書き出しに「この娑婆に掴みどりはなし」と書いている。西鶴は天才のカンで、「この世の中に楽なことはないですよ」、というエントロピー増大の法則に基づく、自然界の原理を悟っていたわけです。いま、毎日のように新聞、テレビで報じられているエネルギー問題、環境問題の根本原因はここにあります。人間が使っても自然の平衡を大きく乱すことのないエネルギーは、水力、バイオマス（木材、穀物など）を含む太陽エネルギーのみなのです。

ところが、我々は、より豊かに、より便利にという気持ち、すなわち、西鶴の言う「掴みどり」を実行しようとして、石炭、石油、天然ガスなどの化石エネルギーや原子力の利用を行っているわけです。

けれども、地球温暖化や大気汚染や核廃棄物の発生が困った問題だからといっても、ガソリン1リットルが80円で、ペットボトル入りのウーロン茶よりずっと安いでは、太陽エネルギーの利用も広まることはできないし、したがってその利用技術も進歩しがたい。人はそれがよくないことだとわかっていても、「掴みどり」ができる間はそれをやめて質素に暮らすほど高貴な性質にはできていないのです。

かといっても、このまま地球環境を悪化させていって、あと100年ぐらい、つまり我々の孫か、曾孫の世界で人類は滅亡して、そのあと地球上は汚染に強いネズミの天下というのも、我々の望むところではないわけです。

こんな自縄自縛みたいな苦境から脱出する道を考える前提として、一体我々はどんな社会を求めているのかを考え直すことが大切でしょう。

歴史を振り返って、先人たちの言動を分析してみると得られる結論は、豊か、満足、ゆとりイコール幸福ではないということです。人は一種のストレスである「感動」の下で幸福でいられる、という幸福の見方に立つと、現状脱出の方策が見えてきます。

つまり太陽エネルギーがもうかるように化石エネルギーや原子力エネルギーに税金をかけて価格を上げてやるのです。（将来の汚染除去やその他の対策費を考えると本当はこれらのエネルギーは高価なものなのです）。

そういう方策は、現状の「掴みどり」のやり方に比較すると、人々のがんばりや、ある程度の不便さを伴うことになるでしょうが、そのときの方が今より幸福なんですよ、という答えが、何千年という人類の歴史を学ぶと既に出ていることに我々は気がつけばよいのです。

つまり、いろいろな既得権を、税金の利用によって適当な時期に解消して、活力ある新しいチャレンジの成功率を高める、という新陳代謝（メタボリズム）を基本にした社会を目指すわけです。

エネルギー問題、環境問題の解決のためには、我々の子どもや孫やその孫たちの行く末を考えて、幸福とは何かについて真剣に考えることが大切なのです。「楽なことはない」という世の中が、実は幸福をもたらしてくれる、と西鶴は言っていたようです。